25 journal
society&business Tokyo25 journal
執筆協力 編集室システムU　okamura.nobuyoshi@gmail.com

「ら野さんの絣の手仕事と野の花遊び」

注文だらけの本づくり　随筆を刊行

あきる野市乙津の浦野孝子さんがこのほど、「ら野さんの絣の手仕事と野の花遊び」と題した随筆を刊行した。記者は製作の手伝いをさせてもらった。

（東京25ジャーナル・岡村信良）

随筆では、素朴で目立たない野の花や絣の切れ端を浦野さんならではの感性でディスプレイ用として表現してきた記録と、その作品に惹かれ集まった生徒たちとの思い出を素直に綴っている。額装された絣（かすり）の切れ端で創作した作品の表紙が美しい。

執筆は3年前から始まった。別に書くことは得意ではないが、何となく書き出した。野の花の作品や絣の手縫いで縁を結んでくれた人たちに少しでも喜んでもらえるものにしたいとの思いでエンピツを走らせた。エンピツと同じくらいに消しゴムも握ったという心血を注いで書き上げた文だ。

タウン誌編集者の友人に見てもらい文がまとまったときは安堵と達成感に包まれた。後は本にしてみんなに届けるだけ。そう思っていたが、そこからが注文だらけで大変なことになってしまった。

■

大変さの大元は何を隠そう記者だった。記者は浦野さんとの共通の知人を介して本の製作作業を引き受けた。長年、地域新聞の記者をしていて、原稿執筆のほか、インデザイン（編集ソフト）を使ってレイアウトもした。インデザインを使えば本の製作作業も簡単だ。気軽に引き受け、横組、左綴じ、表紙の色などを決め、写真などを預かり製作に取り掛かった。

関連する写真を文章の合間に挟み、少しデザイン性を持たせようと表紙のタイトル文字は薄い小豆色。文中の見出しは紺と小豆色を交互に使ってみた。

本の形にして浦野さんに見てもらった。タイトルや見出し、写真の位置、改めて文書を見直してもらい次の工程に進むつもりだったが、とんでもなかった。

■

野の花や絣の端切れに命を吹き込み、作品に仕上げる浦野さんの感性は本の装丁や本文のレイアウトを全く受け入れず、後に打ち明けられたが、「あれを見て本を出すのをやめよう」と思ったそうだ。

それでも気持ちを持ち直し、その後は記者とのやり取りを何度も繰り返し、タイトルの色、写真の位置などを変更。読みやすいように文字も大きくしてほしいとの指摘もあった。とりわけ浦野さんがこだわったのが、表紙写真に使った重量感のある木の額とわずか数枚の絣の切れ端が対峙する妙を著した作品を生かす背景の色。

薄く透き通るようなそれでいて引き込まれるような青。調整を何度も繰り返し、ようやく浦野さんが納得する色になった。苦労の甲斐あって本の表紙はそのまま本棚に飾ってもおかしくない出来栄えになった。

これも全て浦野さんのアドバイスを受け作業を行った成果だった。記者は本の製作作業を引き受けながら、改めて本づくりの奥深さを教えてもらったようだった。

失礼ながら文章は決して上手ではないが、浦野さんの言葉で綴られていて、心に素直に入ってくる。普段から形にはまった記事を書いている記者には新鮮で、これも勉強をさせてもらった思いだ。

「ら野さんの絣の手仕事と野の花遊び」。机の上で当分の間、記者の仕事ぶりを監視してくれそうだ。

なお本は非売品。問い合わせはご遠慮ください。

父が娘に伝える企業理念

相馬光学　浦明子さん

浦信夫会長が相馬光学を興した1976年、次女の浦明子さんはまだ2歳。生家が日の出町の小さな工場だとわかるはずもなかった。それから半世紀近く、父親が育てた光分析における先端企業の舵取りを任されている。

「物心のつくころ、うちは貧乏だと思っていた。私が着る服は姉のおさがりで、住まいと作業場は一緒。ところが中学3年のとき、工業団地に本社工場が建った。いま思うと、大手企業の下請工場から脱出し、自社ブランド製品がヒットしはじめたからだった」

少女時代の思い出を明子さんはこう話す。父親が事業運営に腐心するかたわら、短大までバレーボールに全力で打ち込む日々を過ごす。だが、実業団入りも視野に入った2年次、膝靭帯断裂で夢を砕かれてしまう。

「大学所在地の岩手県でくすぶっていると、父から『東京に帰ってこい』との指示。相馬光学の正社員になり、星薬科大学分析化学科に社会人研究生として入学。院生と席を並べて学んだ。驚いたことに学生実習担当教授からは自社製品の購入も打診された」

このとき父親たちの創造力を認識した。職人気質でマーケティング戦略も心許ない。そんな会社が作ったものが大学や産業の現場で活躍しているのだ。明子さんが2代目を意識しはじめたのはこの時期だったのかもしれない。

「世の中のニーズに合わせて製品を開発していく経営方針は、やがて牛肉の旨味を測定する装置をヒットさせる。あるときから父は、折に触れて次期社長は私だと公言。そして8年前に社長交代。権限をすべて私に移譲し会長職に退いた」

会社を継ぐことは、事業の存続もさることながら、重要なのは理念を継承することである。同社なら、人と人のつながりがビジネスの基本であり、謙虚な姿勢が顧客からの信頼を生むということ。浦会長のいう〝常に感謝〟の気持ちを持ち続ける。

【岡村繁雄】

父の背中　■11■

先代の仕事と教え